

学校自己中間評価報告書(学校関係者評価委員向け)

学校教育目標： 自主的精神にみち、心豊かにたくましく生きていく 子どもの育成	目指す姿(学校像・児童生徒像・教職員像) (めざす学校像) (1)子どもが自ら学び、考える学校 子どもが明るく元気な学校 (2)校内が整頓され、花のある 学校 保護者及び地域住民が気 軽に訪問できる学校 (3)教職員が子どもをよく理解し、可能性を伸ばすこと のできる学校 教職員が自らの能力を高め、指導力の向上に努める 学校
---	--

現状と課題： ○ 安佐南区の南方に位置し、豊かな自然環境と都市型環境が併存している。春日野小学校分離後も児童数が増加し、各学年とも4～5学級の児童数900名余りの大規模校である。 ○ 児童は総じて落ち着いており、安定した学校生活を送ることができ、まじめに学習にも取り組むことができる。しかし、受動的な傾向にもあり、主体的かつ意欲的な学習が成立しにくい面もある。また、児童間の学力の差異が大きいという課題もある。 以上のことから、学校生活全般において、主体的に行動し、ともに学び合う教育活動を推進することが課題となる。	総合評価： 全体的にまだまだ不十分であるという評価が多い。「自ら進んで自分の思いや考えを伝える力」「自主的にあいさつをする力」「地域の教育力を活用する教育活動」「筋力を付ける取組」などが関連付けられながら伸びていくような取組を続ける。1月に向けて【「山本学びのスタイル」を積極的に取り入れた授業づくり】【理由を付けて自分の考えを発表すること】【あいさつ運動の輪を広げること】【地域の教育力を活用した授業で児童が学んだことを地域に発信すること】【なわとびカードを活用した体力つくりと筋力のアップ】の5つを重点的に取り組む。
中期経営目標： 基本的な生活習慣の確立と、学ぶ喜びのある授業の創造を通して、主体的に学ぶ意欲と態度を育てる	評価指標 基礎・基本定着状況調査の国語科・算数科の平均通過率 基礎・基本定着状況調査の基本的生活習慣・自己実現・自己効力感をもつ児童の割合

短期経営目標	評価指標・基準	評価	説明	主な具体的方策	分析コメント	改善策
自ら進んで自分の思いや考えを伝えることができる児童の割合を80%以上にする	4 十分達成できた 自ら進んで自分の思いや考えを伝えることができる児童の割合が80%以上	2	国語科をはじめとして各教科において、かかわり合いの中で学び合うことに力をいれているため、全体の中では思いや考えを表出できなくても、グループ内では思いや考えが出せる児童が増えている。それとともに、全体の間での話し合いも活性化しつつある途上といえる。	国語科を中核とした授業を学級担任が全員公開し、授業研究を深める。(ブロック別の低・中・高学年の公開授業において、指導主事・広島大学教授・広島大学附属小教官等を招請し、継続性のある指導を受け、授業改善を図る。)	課題解決的な学習の展開(山本学びのスタイル)ができた教員は57.6%で半数の教員は取り入れるように努力している。課題解決的な学習活動の展開が、一単位時間におさまらない、授業を組み立てていく(教材研究)の時間が十分確保できていないという課題が上げられる。 一方、児童の84.9%が「山本学びのスタイル」のペア・グループ活動を楽しんでいると感じており、学習活動に位置づいてきているといえる。	教材研究や学年研修の時間の十分な確保を行っていかなければならない。また「山本学びのスタイル」の授業づくりができたの評価指標を明確にすることが必要である。
	3 概ね達成できた 自ら進んで自分の思いや考えを伝えることができる児童の割合が70%以上					
	2 やや不十分である 自ら進んで自分の思いや考えを伝えることができる児童の割合が60%以上			ワークショップ方式の研究協議会を導入し授業研究を活性化する。(ワークショップ方式の協議会により授業観察力・授業分析力を確かにし、自己の授業改善に生かすようにする。)	63.9%の教員が校内研究協議会で学んだことを自己の授業改善に役立てている。また、82.7%の保護者が「子どもは授業の内容がよく分かり、基礎学力が確実に定着している。」と評価していることから、日々の授業改善が実践に反映しているものと思われる。	今、教員が課題としていることを協議会で取り上げ、ワークショップ方式で考えていく。そのことにより、課題を全体のものとして協議し、教員集団がともに高まっていくことができると考える。
	1 不十分である 自ら進んで自分の思いや考えを伝えることができる児童の割合が60%未満					

				「話すこと・聞くこと」の系統案を基盤とした授業の実施を通して、「話す力・聞く力」の定着を図る。（「山本学びのスタイル」を全校で実施し、基本的な授業展開を共有化する。）	75. 8%の教員が学年の「話す・聞く」の系統性を意識しつつ、児童に対話を通して学びを深める実践へとつなげていることが分かる。一方、児童の82. 6%が「人の考えを最後まで聞くように気をつけている」と答えているが、「理由をつけて、自分の考えを発表することができる」児童は55. 1%に下がる。聞くことより話すことに苦手意識をもっている児童が多い。保護者アンケートからは「子どもが自分の思いを相手に上手に伝えたり、人の考えを最後まで聞いたりすることができている」と答えた保護者は、多少、数値に変動があるものの、学年が上がるにつれて多くなる（1年63%～6年78. 2%）。実生活の場では、年齢とともに増す語彙数や経験の積み重ねが「話す・聞く」ことに影響してくるものと	今後も学年研修の時間を定期的にもちつつ、実践をふりかえり、学年単位の取組の見直しを行っていくように研修部から声を掛ける。 理由を付けて発言しなければならぬような発問、話したくなるような話材提示・学習展開など指導工夫を教員がしていく。 また、日常生活においても、理由を付けて述べるような場をもったり、理由を聞き出すことのできる教員や学級・学年集団、学校内の受容的な人間関係を築いていく必要がある。
自主的にあいさつをすることができる児童の割合を90%以上にする	4 十分達成できた 登下校時や学校内であいさつを自主的にする児童の割合が90%以上	2	登下校時も学校内でも教員側からあいさつをすれば、ほとんどの児童はあいさつを返すが、教員側があいさつをする前に、自分からあいさつをする児童は多くないという実態がある。 10月の教員アンケートの結果からも保護者アンケートの結果からも、自主的にあいさつをすることができる児童の割合は70%にとどまっているということが言える。	児童会の自治的な活動を通じてあいさつ運動を推進し、進んであいさつをする意識を高め、実践力を高める。（ふり返しカードの実施、あいさつの啓発運動等を推進する。）	あいさつ運動に関しては、担当委員会のみで行っており、朝のあいさつ以外の啓発活動が弱い。ため、この割合になったと考えられる。	生活委員会による、あいさつ運動は続けていく。全校職員・全校児童にもあいさつ運動の輪を広げていく。
	3 概ね達成できた 登下校時や学校内であいさつを自主的にする児童の割合が80%以上			教職員自らあいさつを実践し、児童の自主的にあいさつをする力を高めるようにする。（あいさつの意義やあいさつの様子などについても登校指導・学級指導・朝会等で話をする中で、児童の意識を高め、実践力を高める。）	登下校指導や学級指導で、あいさつの意義についての指導はしているが、自主的にあいさつをするレベルにまで児童が育っていない。	引き続き指導はしていくが、児童の手本となるよう、教員が相手の目を見て、笑顔で、大きな声で、挨拶をするよう、意識する。
	2 やや不十分である 登下校時や学校内であいさつを自主的にする児童の割合が70%以上			学区内の住民・生徒等によるあいさつが交わされる環境づくりに努め、あいさつする力を高める。（教職員による地域住民や外来者等への積極的なあいさつを進め、児童の自主的なあいさつを促す）	教員がそばにいて指導すればあいさつをするが、児童だけでは地域の方にあまりあいさつをしていないといえる。	学校たよりや学級懇談会を利用して、保護者に対してもあいさつの大切さを呼びかけていく。
	1 不十分である 登下校時や学校内であいさつを自主的にする児童の割合が70%未満					

地域の教育力を積極的に活用した教育活動に対する肯定的な評価の割合を80%以上にする。	4 十分達成できた 地域の教育力を積極的に活用した教育活動に対する肯定的な評価の割合が80%以上 3 概ね達成できた 地域の教育力を積極的に活用した教育活動に対する肯定的な評価の割合が70%以上 2 やや不十分である 地域の教育力を積極的に活用した教育活動に対する肯定的な評価の割合が60%以上 1 不十分である 地域の教育力を積極的に活用した教育活動に対する肯定的な評価の割合が60%未満	3	地域の教育力を生かした授業に対する児童の満足度は非常に高く、特に低学年ほど「とても思う」の割合が大きい。保護者も概ね満足していると言える。教員についても地域の教育力を活用した授業を実施したという点での評価は高い。一方で学習のねらいや内容について、質的な面で不十分だと感じている教員が多く、特に学習の発信については「できていない」と考えている教員が75%近くになる。学習の実施が後期中心の学年もあるため、年度末の評価を待つ必要があるが、実施内容に苦慮している学年もある。本校の総合的な学習の時間と生活科の教育課程そのものが系統的に確立しているとは言えない面もある。	各教科および総合的な学習の時間で、ゲストティーチャーとして地域の方を招き、各学年とも年1回以上の地域の教育力を活用した授業を推進する。(ゲストティーチャーを通じて、教職員、書籍やネット等から学ぶことのできない生きた学習体験を成立させる。) 地域の教育力を活用した授業では、学習指導要領の目標と学習活動を結びつけたねらいの明確な学習を成立できるよう工夫・改善を図る。(学習指導要領の目標と、学習活動と学習内容が結びついた授業づくりを推進する。) 地域の教育力を活用した授業を通して学んだことを地域に発信することを通じて、相互に学び合う授業づくりをする。	学習の実施という点では満足度の高い評価になっている。特に児童の満足度は高く、低学年では「とても思う」の割合が極めて大きい。保護者も肯定的に評価しており、教員も概ね満足していると言える。 学習のねらいや内容について、質的な面で不十分だと感じている教員が多い。学習の実施が後期中心の学年もあるため、年度末の評価を待つ必要があるが、実施内容に苦慮している学年もある。本校の総合的な学習の時間と生活科の教育課程そのものが系統的に確立しているとは言えない面もある。 児童は概ね高い評価をしているが、教員は不十分だと捉えている。学習の実施が後期中心の学年もある。学習したことが教室の中で留まっていることを感じた評価であると考え。	学習の実施という点では、現在の取り組みを続けていく必要がある。但し、他の項目の評価から考えて、教育課程の見直しを図り、実施内容について系統的に改善する必要がある。 生活科と総合的な学習の時間の各学年の学習内容が、教育目標に沿った系統的なものになっているかどうか見直していく必要がある。 学んだことを地域に発信する活動や取り組みを学習過程に盛り込む必要がある。例えば、お礼の手紙を書いたり、学んだことを新聞やレポートにまとめたりして、学校へ行く週間や地域の公民館まつりで展示するなどの取り組みが考えられる。
筋力を付け、健康的な生活を送ることができる児童の割合を80%以上にする	4 十分達成できた 筋力を付け、健康的な生活を送ることができる児童の割合が80%以上 3 概ね達成できた 筋力を付け、健康的な生活を送ることができる児童の割合が70%以上 2 やや不十分である 筋力を付け、健康的な生活を送ることができる児童の割合が60%以上 1 不十分である 筋力を付け、健康的な生活を送ることができる児童の割合が60%未満	2	保健だよりや食育だよりを通して、学級指導は概ねできていたが、体力づくりの面において取組が遅かったため、全体としての評価はやや不十分である。	多様な動きをつくる運動(文部科学省)や小学校体育科実技事例集、体力アップハンドブック(市教委)等を活用し、筋力(体を移動する・力を試す)の向上を意識した指導方法を工夫し、児童が見通しをもって主体的に体力づくりに取り組むことができるようにする。 保健だよりや食育だより等を活用して学級指導を毎月行い、食生活や保健・安全に関心をもち自ら実践する児童を育てる。	年度当初より、体力づくりの計画を見通しをもって立てることができず、新体力テストの結果を待つこととなったため、取組が遅れた。 教員の日々の学級指導が生かされたと思われる。それにより家庭での意識が高まり、生活リズムに関して積極的に取り組んでもらうことができた。	新体力テストの結果筋力が劣っていることが分かったため、なわとび朝会を行ったりなわとびカードを活用したりして、体力アップを図るとともに、体育の授業では、体力を高める運動や力試しの運動を重点的に指導する。 引き続き学級指導を行っていくが、児童への啓発だけでは生活リズムの改善は難しいので、学年だよりや学級懇談会等を通して保護者への働きかけをしていく。